

魅せどころ

開閉は自在 呼吸する塀

海野 健三

1949年東京生まれ。東京理科大建築科卒。自邸を手づくり、クーラーも手づくり。設計と施工を手がけ両面から建築を探求する。

ジャロジー(可動よろい戸)という規格の窓がある。それを塀にはめ込んで、ガラスの代わりに板を使った。手軽に扱えるように電動開閉にして、いっせいに開け閉めできるようにした。スイッチは居間の隅にある。開けると風が通り光も入る。植木のためにも風が通り抜けた方がいい。

プロック塀を作ってしまう家がよく見るが、街路環境を悪くするし、自分の植木や家のためにもよくない。ちょっと目隠しのつもりが、小さな周りの社会への目隠しにもなってしまう。

しかし、この塀を作るにあたっては建て主を説得するの



が大変だった。プロック塀より高価になるし、金をかけて何だかわけのわからぬものを作ってくれるな、という感じだった。作る職人もそんなものやっただけで帰ってしまった。孤軍奮闘したが、出来上がった。街路面の表情もやさしく気に入った。周りの環境があまり好ましくない場合、一つの建築手法として外部に対して目隠しするよう

な閉鎖的なものにして、内部空間に中庭などを取り込み、自分の所だけは豊かにしようとする。だが、隣人はどうなのか。外から見たらあまりよろしくない環境の中に、また一つ劣悪な環境が増えただけである。だいたい、そんな閉鎖的なものばかりになったら

閉鎖的なものにして、内部空間に中庭などを取り込み、自分の所だけは豊かにしようとする。だが、隣人はどうなのか。外から見たらあまりよろしくない環境の中に、また一つ劣悪な環境が増えただけである。だいたい、そんな閉鎖的なものばかりになったら

人間の街は獄舎になってしまふべければいいというような間題ではない。現在設計中の家が下町で、家々の街路面は、かなり開放的である。最近、建て替えられたものの多くはおそまつなものが、昔からの家はすだれぐらいいが街路との境界で、中にいる人の体温が伝わってくるようだ。心理的に人がとても近い所にいる。生活は隣りつつ抜けたが、それでよしとするすがすがしさがある。そんな空間は子供のころ、親に抱かれていた時の安心感を思い出させる。安心の様子が心の中で発酵して、幸せな思いがふくらむを感じる。

二ニュースでは、車の前に割り込んだといっして、クラクションを鳴らし、殺し合いになったことを報じる昨今である。人のぬくもりを感じさせる住まいを作ることがますます難しくなる時代ではある。だが、日本人も社会に責任転嫁するより、そろそろ自分のこととして考え直してみる必要がありそうだ。